

社医研との出会い・・・諸先輩にはかないませんが・・・

18年目になりました

滋賀医科大学・社会医学講座・衛生学部門 北原照代

私が社会医学研究会（社医研）に初めて参加したのは、1991年7月に大津市で開催された第32回総会（総会事務局：滋賀医大予防医学講座）でした。私は同年3月に大学を卒業し、1年間大阪・西淀病院で研修後、滋賀医大の大学院に進学することにしていました。そのため、「社医研という研究会があるから参加して」と言われて行ってみたら、ほとんどスタッフの一員としてみなされていました。何がなんだか分からないまま、手伝いにきていた滋賀医大の学生さんや卒業生の方々と一緒に、会場をうろろしていたのが思い出されます。そのときの抄録集が今手元にあり、見直してみると、メインテーマが「ふたたび社会医学とは何かを考える」。当時教授であった渡部眞也先生らしい、「直球ど真ん中」のテーマ設定でした。そういえば、大学院生の時、社医研の演題発表について教室で議論するたびに、「何故この調査研究を社医研に発表するのか」「何が社会医学なのか」について常に意見を求められ、うまく説明できない自分にもどかしさを感じたものです。議論を積み重ねるうちに、いつしか、「社医研で発表するのはこのような視点で」と考えて、演題をエントリーするようになったと思います。

私の社医研での発表デビューであり、またおそらく社医研でなければ演題発表できなかったテーマ、それは「聴覚障害者の受療権の保障について」（第34回総会、1993年）です。後に、「聴覚障害者に受療抑制はあるか？」のテーマで、学位研究以外で初めてのファースト（筆頭著者）論文となりました。聴覚障害者の医療については、医学部卒業後しばらく、全国手話通訳問題研究会での活動として、個人的に調査に関わっていたのですが、滋賀医大の大学院生となってから、教室でも議論することになりました。「聴覚障害者に受療抑制はあるか？」の論文をご指導いただいた時、渡部先生が「これこそ社会医学」と言ってくださったことは、今でも忘れられません。手話通訳者の健康問題とともに継続して取り組んでいるテーマであり、今後、聴覚障害者に限らず、もう少し視野を広げてみようと考えています。

早いもので、社医研と出会って今年で18年目を迎えます。第32回総会の抄録集1ページ目には、「これから本会を背負っていく人たちが、本会の存在価値・存在理由をしっかりと認識し、より各自の学問的取り組みを有効適切なものにされんことを念願し表記の主題を掲げた」と記されています。まだまだ力およばずですが、この言葉を忘れず努力していきたいものです。